北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

生徒が主体的に学ぶ「古典探究」の提案 ：『源氏物語』『大鏡』翻作を用いた探究的な古典の学び

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-09-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岡田, 陽子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000298

生徒が主体的に学ぶ「古典探究」の提案

『源氏物語』『大鏡』翻作を用いた探究的な古典の学び

岡 田 陽 子

キーワード　古典　翻作法　源氏物語　大鏡　電子図書館

1，研究の目的

本研究は、高校2年生の古典 B（旧課程）の授業の中で、「古典探究」を視野に入れて行った一連の実践である。

生徒が古典の学習、というときにイメージするのは多くは単語の暗記であったり、文法の学習とそれらにともなう口語訳の作成だったりと、内容を読み深めること以前の知識・技能の習得にのみ重きを置いたものにとどまってしまっており、主体的に内容を読み深めるまでに至らないのが現状の課題である。これに対し、生徒が古典作品と現代を生きる彼らの言語生活を関連付けながら、主体的かつ豊かに読むための取り組みとして、翻作法を用いた二つの授業実践について述べる。

2，生徒の実態と単元について

（1）生徒の実態

本校においては、卒業後はほぼすべての生徒が大学進学を希望しているため、入試のことを考慮し教師の指導も内容面より文法や古文常識など、知識面の指導に偏り、生徒も、インターネット上の口語訳や解説、教科書ガイドを参照してノートを完成させることに終始している場合が多い。しかし、古典を学習することの本来の楽しみは、先人のものの見方や考え方や優れた表現に触れて自分自身の世界を広げ、言語生活を豊かにすることであり、知識・技能の側面はその楽しみに至るまでの手段にすぎない。そうであるにも関わらず、古典の授業はややもすると知識偏重の指導に陥り、作品としての豊かな読みの世界は開かれにくい。また、季節感や習俗も大きく異なり、生徒が世界観をイメージしにくいこともそれらの原因として挙げられるであろう。

今年度の大河ドラマ「光る君へ」は、紫式部を主人公として国風文化の全盛期を描いているが、インターネット上では、古典について現代の感覚と変わらない親子や主従、恋人同士の感情を持った人々の生きた世界である、ということに多くの人々が驚き、共感を持って視聴している様子が見受けられる。古典の世界に想像力を働かせて親しむことは、きっかけさえあれば十分に可能であることの証といえる。

（2）単元について

古典を豊かに、想像力を働かせながら読み深めるための契機として、生徒が自分のものの見方や考え方と古典の登場人物とを重ね合わせ、同じ「生きた人間」として作品を読み深めるため、以下の二つの視点を設定し、連続する二つの単元を考えた。

【視点1】 読み取った内容を自分のものの見方、考え方に重ね合わせながら表現する。
【視点2】 複数の文章を組み合わせて多面的に読む。

実践ⅠⅡで取り上げる学習材の読解には、本格的に敬語をはじめとした知識事項に習熟することが必要であり、ようやくひととおりの文法事項を学び終えたばかりの生徒にとって、文法事項に留意しながら一人で読み進めるのはハードルが高い。そこで、「難しい古典作品を読むのだ」という心理的負荷を下げるため、あ

えて「ゲームを作る」という、楽しく読み、[1]楽しく学べる単元の目標を設定した。

実践Ⅰでは、『大鏡』『紫式部日記』『枕草子』を取り上げる。摂関政治の全盛期を描いたこれらの作品には、栄華を極めた藤原道長や、その周辺の人物が多く登場する。私たちが道長について知り得る情報は、日本史の授業で扱われる内容と、古典の時間に読む「弓争い」や「肝試し」に表れる栄華を極めた後の最高権力者の片鱗を見せる、傲岸不遜な人物というものが一般的であろう。しかし、たとえば『紫式部日記』で待望の皇子誕生に驚喜する道長は、おそらく生徒がイメージする人物像からは大きくかけ離れた、人間味あふれるものであろう。また、「弓争い」において叔父の態度に怯え的を外す小心者の伊周は、定子中宮に近侍した清少納言が描いた『枕草子』では、知的で華やかな貴公子として読者の前に立ち現れる。このように、作品が成立した事情や背景によって登場人物の描かれ方は大きく異なっていることに気づくことができるのは、これらの時代に成立した作品群を読み比べることの非常に大きな利点であろう。このように考え、複数の文章からそれぞれの人物を多面的に分析して自分なりに捉える活動として、「複数の文章を読み比べ、人物分析チャートを作る」という単元を考えた。

実践Ⅱで取り上げる『源氏物語』は言わずと知れた日本を代表する文学作品であり、特に「若紫」「光る君誕生」「須磨の秋」は多くの教科書に採録され、広く親しまれている。そこに描かれる生活や文化は、生徒がイメージする平安時代の暮らしとしてもっともイメージしやすいものであるだろう。一方で、長編作品であることから、なかなか全体に触れる機会はなく、生徒も「プレイボーイがたくさんの女性と付き合う」といった程度の把握になりがちである。さまざまな女君との出会いの中で、人生の悲哀を知る「人間・源氏」の姿をとらえるに至っている生徒はほぼいない。深い教養と観察眼に支えられた、日本が世界に誇る文学作品のあらすじさえ知らずに、部分だけを捉えて『源氏物語』を学んだとはいえまい。このような問題意識から、「すごろくを作る」という活動を設定し、「楽しく物語を全体としてとらえる」活動を計画した。

3, 各単元の意図

(1) 実践 1『平安人物性格診断チャート』を作ろう。(高校2年)

育成すべき国語の能力		
知識および技能 言葉の特徴や使い方に関する事項	思考・判断・表現力等 読むこと	主体的に学習に取り組む態度
(1)ア　古典に用いられている語句の意味や用法を理解し，古典を読むために必要な語句の量を増すこと。	ク　古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して，我が国の言語 文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。	登場人物について、他の作品や時代背景などから多角的に捉えようとしている

ア, 単元の目標

(知識及び技能) ・敬語の学習を通じて、作品を読むために必要な語句やその意味内容を理解し、作品の読解に役立てることができる。 【我が国の言語文化に関する事項(1)(ア)】

[1] 首藤久義 「第四章　翻作のすすめ」『国語を楽しく』(2023　東洋館出版)扉

（思考力、判断力、表現力等） ・同時代に書かれた複数の古典作品について登場人物の描かれ方を読み比べることで、作品の持つ性質や登場人物の性格について自分の考えを広げて表現することができる。 【A　読むこと(ク)】 （主体的に学習に取り組む態度）登場人物について、複数の文章を読み比べて捉えようとしている。

イ, 単元の構成

1～3	学習活動	学習内容	評価基準・評価内容
	【本時の目標】 ・敬語の基本について理解する　・文学史を確認する　・本文の読み方を確認する		
	○「平安時代の人物を利用して性格診断チャートを作成する」という単元の目標を知る。	・単元の目標の理解	
	○便覧を参照し、『大鏡』『紫式部日記』『栄華物語』『枕草子』の文学史を知る	・文学史の理解	【読】の①②
	○「弓争い」の範読を聞き、漢字の読みと登場人物を確認する。	・本文の確認	
	○登場人物に使われている敬語に注目し、印をつける。	・登場人物の整理	【言】の①②
	○主語や口語訳上のポイントに留意しながら、助動詞や敬語の意味が明確になるように口語訳する。	・敬語の確認	【言】の①②
	○伊周と道長について、その人物像をまとめる。	・人物像の理解	【読】の③ 【知】の①
	○「枕草子」・「栄華物語」に描かれた伊周と道長について現代語訳を使うなどして読み、その人物像の差がどこから生じるのか考えワークシートにまとめる。	・作品背景の理解	【知】の② 【読】の②③
4～6	【本時の目標】 ・単元の目標を知る。　・敬語の復習。　・平安時代の文学史を知る		
	○敬語に関する小テストに取り組み、文法事項を理解する。	・敬語の復習	【知】の①
	○『大鏡』『紫式部日記』『栄華物語』『枕草子』の文学史を振り返りながら、人物分析のポイントを整理する。	・視点の確認	【読】の②
	○プリントを用い、複数の本文からそれぞれの人物の性格を分析する。	・本文の読解 ・人物像の分析	【学】の② 【読】の③
7～8	【本時の目標】		

	・敬語の理解　・人物の理解		
	○敬語に関する小テストに取り組み、文法事項を理解する。 ○それぞれの作品の成立背景を踏まえながら、人物像を立体的に理解する。 ○読み取った人物像を元に、性格診断チャートを作成する。 ○各班が制作した性格診断チャートに取り組む。	・敬語の理解 ・成立背景の理解 ・人物像の理解 ・人物像の理解	【知】の① 【読】の③ 【読】の④ 【学】の②

ウ, 評価の規準・基準

	知識および技能	思考力・判断力・表現力等 【読】読むこと	【学】主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	・敬語の学習を通じて、作品を読むために必要な語句やその意味内容を理解し、作品の読解に役立てることができる。	・同時代に書かれた複数の古典作品について登場人物の描かれ方を読み比べることで、作品の持つ性質や登場人物の性格について自分の考えを広げて表現することができる。	・登場人物について、複数の文章を読み比べて捉えようとしている。
学習活動に即した評価基準	①敬語の基本的な用法について理解できる。 ②二方面敬語などの学習を通じて、登場人物同士の関係や作者の立場などを理解することができる。	①平安時代の文学史を理解することができる。 ②それぞれの作品の成立背景について理解することができる。 ③それぞれの本文の表現に即して内容を読み取り、人物像を捉えることができる。 ④複数の本文を比較し読み取った人物像をについて、工夫して表現することができる。	①表現に基づいてそれぞれの本文を読みとろうとしている。 ②読み取った内容を踏まえて人物像を捉えようとしている。

エ, 文法面の指導について

実践 1 では、取り扱う本文に複雑な敬語表現が用いられているものが多く、文法事項の復習には適した学習材といえる。基本的な敬語についてはすでに1年次に学習しているため、ここでは第一次で取り扱う「弓争い」を使って、二方面敬語等のやや高度なものについて指導した。また、生徒が本文の読解に取り組む際には、適宜敬語に注目し、作者から見る登場人物との関係において注目するよう助言した。

オ, 単元の意図および内容面の指導について

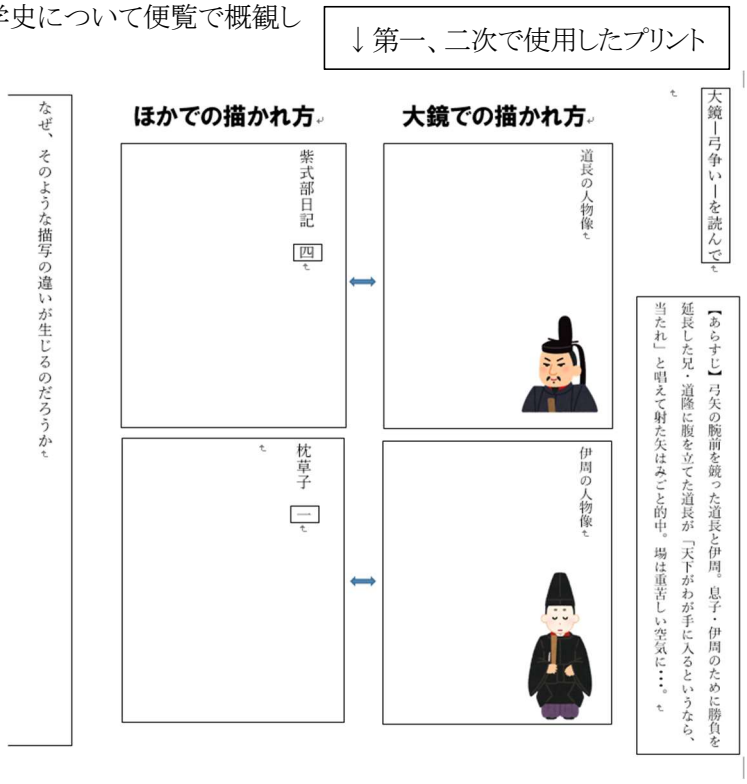
	栄花物語	大鏡	枕草子	紫式部日記
ジャンル	歴史物語	歴史物語	随筆	日記
作者	赤染衛門ほか	未詳	清少納言	紫式部
立場	道長に近い		道隆に近い	道長に近い
その他	編年体	紀伝体		

本単元では、①作品群が概ね同時代に書かれたものであること②同じ人物が登場すること③異なる立場から描かれた作品であることという三つの特徴に注目し、「性格診断チャートを作成する」という学習活動によって、登場人物を多面的かつ生きた人間として立体的に捉えることを企図した。

「〇〇診断チャート」は、一般的にもよく目にするものであり、成果物が生徒にイメージしやすい。また、チャートを作成するには、その人物の特徴や印象的なエピソードが重要となる。そこで、その人物の特徴をとらえるために、同一人物について、あえて、背景が政治的に大きく対立する作品を取り扱い、たとえば「弓争い」のエピソードでは小心者として描かれる伊周が、『枕草子』では明朗な貴公子であるような本文を組み合わせることで、生徒が自然にその人物について多面的に特徴を捉えられるようにプリントを作成した。

第一次では、平安時代（中古）の文学史について便覧で概観したのち、「弓争い」を学習材として道隆・道長・伊周の三人の登場人物について整理した。また、学習材を読む際には、敬語表現の違いに留意すると、作者がどのようにその人物を捉え、描いているかが読み取れることに注目するよう助言した。次に、プリントとワークシートを用い道長と伊周の他作品での描かれ方を整理した。ここで生徒は、作品によって大きく彼らの描かれ方が異なることと、その作品の成立の背景が関与していることに気づくことができた。

↓第一、二次で使用したプリント



第二次では、道長と伊周に加え、道隆と公任についても文章を読み、第一次での「作品の成立背景と人物の描かれ方には深い関わりがある」という気づきを活かしながらそれぞれの人物像を読み取り、整理した。また、ジャパンナレッジ School（電子図書館）なども参考としながら読み、多様な面からそれぞれの人物像をとらえ、自分の考えを持つことができた。

第三次では、実際に「性格診断チャート」の作成に取りかかった。第二次で学習材から読み取った性格の特徴や、調べた様々なエピソードを元に「どのような選択肢を作るとその人物の性格が最もよく理解できるか」「正反対の人物は誰か」な

紫式部日記

十月十余日までも、御帳出でさせ給はず、西の傍なる御座に、夜も昼もさぶらふ。殿の、夜中にも晩にも、参り給ひつつ、御めのとの懐をひき捜させ給ふに、うちとけて寝たる時などは、何心もなくおぼえられておどろくも、いといとほしく見ゆ。心もとなき御程を、わが心をやりてさぶうつくしみ給ふも、ことわりにめでたし。あるときはわりなきわざしかけ奉り給へるを、御紐ひき解きて、御几帳の後にて、あぶらせ給ふ。「あはれ、この宮の御尿にぬるるは、うれしきわざかな。このぬれたる、あぶるこそ、思ふやうなる心地すれ。」と、喜ばせ給ふ。

大鏡（太政大臣道長）

四条大納言のかく何事もすぐれ、めでたくおはしますを、大入道殿、「いかでかかからむ。うらやましくもあるかな。わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ。」と申させたまひければ、中の関白殿・粟田殿などは、げにさもとやおぼすらむと恥づかしげなる御気色にて、ものもたまはぬに、この入道殿は、いと若くおはします御身にて、「影をば踏まで、面をや踏まぬ。」とこそ仰せられけれ。まことにこそさおはしすめれ。内大臣殿をだに、近くて見奉りたまはぬよ。

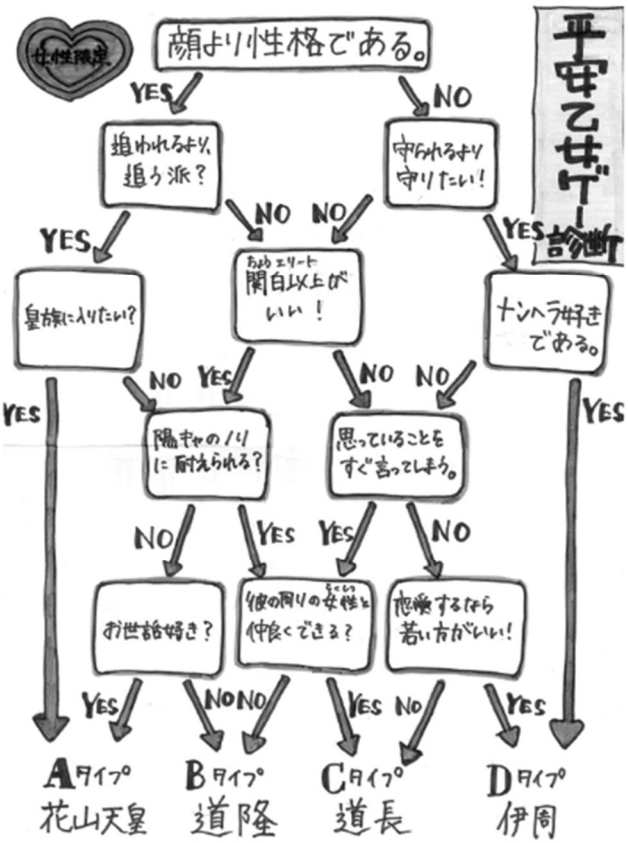
大鏡（内大臣道隆）

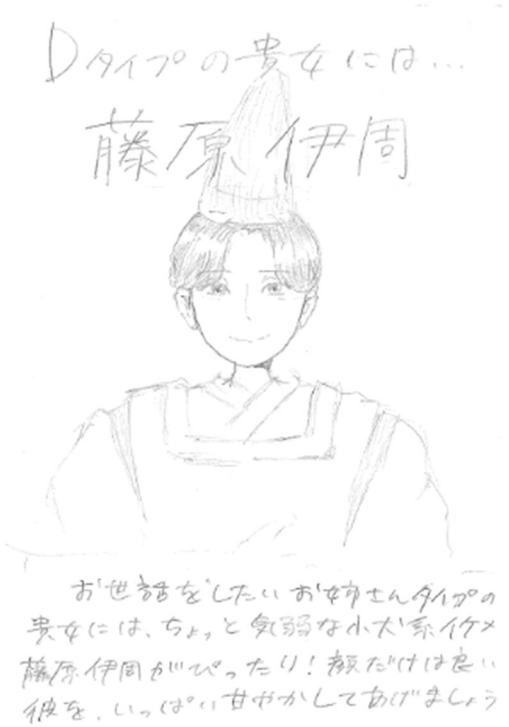
いかにと思へど、御前どももえおどろかしまうさで、たださぶらひなめるに、入道殿おりさせたまへるに、さてあるべきことならねば、帳の戸ながら、高やかに、「やや」と御扇を鳴らしなどせさせたまへど、さらにおどろきたまはねば、近く寄りて、表の御袴の裾を荒らかにひかせたまふ折ぞ、おどろかせたまひて、さる御用意はならはせたまへれば、御櫛・笄、具したまへりける取り出でて、つくろひなどして、おりさせたまひけるに、いささかさりげなくて、清らかにてぞおはしましし。されば、さばかり酔ひなむ人は、その夜は起きあがるべきかは。それに、この殿の御上戸は、よくおはしましける。

枕草子（第二九三段）

上の御前の、柱に寄りかからせ給ひて、少し眠らせ給ふを、「かれ見奉らせ給へ。いまは明けぬるに、かう大殿籠るべきかは。」と申させ給へば、「げに。」など、宮の御前にも笑ひ聞こえさせ給ふも、知らせ給はぬほどに、長女が童の、鶏を捕らへ持て来て、朝に里へ持て行かむと言ひて隠し置きたりける、いかがしけむ、犬見つけて追ひければ、廊のまきに逃げ入りて、恐ろしう鳴きののしるに、みな人起きなどしぬなり。上もうち驚かせ給ひて、「いかでありつる鶏ぞ。」などたづねさせ給ふに、大納言殿の、「声、明王の眠りを驚かす。」といふことを、高ううち出だし給へる、めでたうをかしきに、ただ人の眠たかりつる目もいと大きになりぬ。「いみじき折の言かな。」と、上も宮も奥ぜさせ給ふ。なほ、かかることこそめでたけれ。

ど、それぞれで話し合いを深めて性格診断チャートを作成した。「こんな人、見たことある」「この性格を表すのにもっとも面白い選択肢は何があるだろう」など、活発な話し合いが行われた。以下に示したのは、実際の生徒の作品の一部である。





この単元を通じ、生徒は同じ時代、人物を描いていても描かれ方にはかなり差があることや、現代にも通じることではあるが、視点を変えることでまったく異なる物語がそこに立ち現れることに気づくことができた。また、描かれた人物たちを自分たちと比べながらチャートを作成することで、古典世界に生きた人々に親しみを持ち、現代の自分たちとの考え方や生き方には共通する点も多いことに気づくことができた。これらは、我が国の伝統的な言語文化を尊び、受け継いでいく担い手としての生徒の意識の基盤として非常に重要な視点であると考える。

(2)実践Ⅱ『源氏物語すごろく』を作ろう。(高校2年)

育成すべき国語の能力		
知識および技能 言葉の特徴や使い方に関する事項	思考・判断・表現力等 読むこと	主体的に学習に取り組む態度
(1)ア　古典に用いられている語句の意味や用法を理解し，古典を読むために必要な語句の量を増すこと。 (2)ア　古典などを読むことを通して，我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など 外国の文化との関係について理解を深めること。	ウ　古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりすること。	登場人物について、自分の考え方などと重ね合わせながら捉えようとしている

ア，単元の目標

(知識及び技能)
・『光る君誕生』にあらわれる助詞や助動詞の意味や用法を整理し、古典を読むために必要な知識について理解することができる。【我が国の言語文化に関する事項(1)(ア)】
・『源氏物語』と白居易の関係について知り、我が国の文化と中国の文化とのの関わりについて理解することができる。【我が国の言語文化に関する事項(2)(ア)】
(思考力、判断力、表現力等)
・『源氏物語』の登場人物について読み，その内容や人物像に関する解釈を自分の体験と結び付けながら考えを深めることができる。【A　読むこと(ウ)】
(主体的に学習に取り組む態度)登場人物について、自分の考え方などと重ね合わせながら捉えようとしている。

イ，単元の構成

	学習活動	学習内容	評価基準・評価内容
1～2	【本時の目標】 ・単元の目標を知る。　・用言及び助動詞の復習。　・『源氏物語』の文学史を知る。		
	○用言に関する小テストで、活用表を確認する。 ○「光源氏の一生をたどるすごろくを作成する」という単元の目標を知る。 ○『源氏物語』の文学史を知る。 ○便覧を参照し、源氏の一生を彩った女君たちの存在を知る。 ○自分が分析を担当する女君を決める。	・用言の復習 ・単元の目標を知る。 ・文学史を知る ・作品のあらすじをつかむ	【知】の③ 【知】の①

	○『源氏物語』の冒頭を音読する。 ○便覧を参照し、ワークシートを用いて光る君誕生に至るまでの背景について整理する。	・表現の特色の理解 ・作品世界の理解 ・表現の特色の理解	 【知】の② 【読】の①
3～7	【本時の目標】 ・助動詞の確認　・登場人物の理解		
	○助詞・助動詞に関する小テストに取り組み、文法事項について振り返る。 ○各自の担当する女君について、図書館の資料等を参照しながら整理する。 ○発表用の資料を作成する。 ○調べた内容についてクラスで発表する。 ○「一番幸せな女君はだれか」クラスで投票する。	・文法の理解 ・登場人物の理解 ・	【知】の③ 【読】の② 【学】の① ・
8　～ 10	【本時の目標】 ・発表を聞き、作品世界を理解する。		
	○助詞・助動詞に関する小テストに取り組む。 ○グループで「源氏の一生すごろく」を作成する。 ○できあがったすごろくを使ってすごろく大会をする。 ○光源氏の一生について自分の考えを持つ。	・文法の理解 ・内容を捉え直す ・活動の振り返り ・自分の考えを持つ	【知】の③ 【学】の②【読】の③ ・ワークシートの観察 【学】の③

ウ，評価の規準・基準

	知識および技能	思考力・判断力・表現力等 【読】読むこと	【学】主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	・『光る君誕生』にあらわれる助詞や助動詞の意味や用法を整理し、古典を読むために必要な知識について理解することができる。 ・『源氏物語』と白居易の関係について知り、我が国の文化と中国の文化とのの関わりについて理解することができる	・『源氏物語』の登場人物について読み，その内容や人物像に関する解釈を自分の体験と結び付けながら考えを深めることができる。	登場人物について、自分の考え方などと重ね合わせながら捉えようとしている。

学習活動に即した評価基準	①『源氏物語』の文学史を理解することができる。 ②物語の構想や表現の背景に漢詩の影響があることを理解することができる。 ③基本的な助詞・助動詞について意味や用法を整理し、理解することができる。	①『源氏物語』の文学史やあらすじについて理解することができる。 ②便覧や他の資料を活用しながら内容を読み取り、人物像を捉えることができる。 ③とらえた人物像をふまえて物語を捉え直し、工夫して表現することができる。	①様々な資料を活用して登場人物を理解しようとしている。 ②とらえた人物像が伝わる工夫を考えようとしている。 ③光源氏ほか登場人物について、自分の考えを持とうとしている。

エ，文法面の指導について

	学習材と主な指導事項 （＊第一学習社「国語総合」「古典B」）	
	学習材	指導内容
1年	児のそら寝	用言
	絵仏師良秀	辞書の使い方、主語の捉え方
	東下り	助動詞
	徒然草	口語訳の方法
	木曽の最期	敬語の基礎
2年	大江山・歌ゆえに命を失ふこと	和歌の修辞・古文常識
	光る君誕生	助動詞の復習

実践ⅠⅡともに2学年後半にあたっており、古典常識等も含め、文法などの知識を活かし、自分で基本的な口語訳に取り組みながら読むことはできる状態であった。しかし、二方面敬語や推定の助動詞など、直接の口語訳には大きく影響しないが、場面を捉えるためには留意しなければならない文法事項は多い。主に帯単元で扱い、小テストで定着度をはかることで、文法の理解を狙った。

オ，内容面の指導について

『源氏物語』の冒頭は、主人公・光源氏がこの世に生を受けるまでの経緯について、一条帝と定子を思わせる源氏の両親の関係と周囲のやりとりについて、長恨歌を引用しながら不安定な政治状況と常識外れの愛情が波乱を感じさせる筆致で描かれている。後に源氏がなぜ母の面影を追い求めたり、帝の皇子でありながら臣下に下り、一時は須磨退去まで追い込まれたりするのかといった、物語の伏線ともいえる設定が書かれている。このような不安定なバックボーンを持っていることも、源氏が世紀のプレイボーイだ、という認識しか持たない生徒にとってはある意味新鮮な驚きを持って受け止められ、また、そのような生い立ちを持った源氏がどのように生涯を送っていくのかという疑問に至る契機となりうると考えた。

また、『源氏物語』の主人公は源氏ではなく、源氏の生涯にあらわれる女君たちである、と考えることもできる。彼女たちとの関係性の中で光源氏が何を思い、どのように変わっていくのかという視点で作品を読むと、これが単なるラブストーリーではないことが感じられるだろうとも考えた。

そこで「光源氏すごろくを作成する」という活動を設定し、生徒が主体的に本文にあらわれる登場人物たちについて読み、その人々との交流の中で光源氏がどのように生きたかをとらえることを狙った。すごろくは難しいルールもなく、人数がある程度増えても同時に楽しく遊ぶことができ、また、全体を時系列で振り返るに

は格好のボードゲームである。また、「人生ゲーム」のように止まったマスにポイントを付けたり、「～マス戻る（進む）」などのルールを設定したりすることで、その出来事が源氏にとってどのような意味を持っていたか、生徒自身が意味づけする効果も期待できる。

第一次では、「すごろくを作る」という課題を設定し、その主人公である光源氏について整理した。便覧などを活用しながら、基本的な『源氏物語』の知識やあらすじについて理解を深めた。「光る君誕生」の学習では、光源氏が決して望まれた子ではなかった、物語世界に波乱を生む存在であったことについて、ワークシートを活用しグループで話し合った。「意外に逆境に生まれたのだな」「どうやって位を極めていくのだろう」などという声が上がった。

第二次では、各自で担当を決め、女君たちについて「どのような人物か」「源氏との関係はどのようなものか」などを調べ、資料をまとめた。特に現代語訳を授業で教えることはせず、ジャパンナレッジ School（電子図書館）に所収の『日本古典文学全集』や『ビギナーズ・クラシックス』等を活用したり、図書館の資料を活用したりするよう指示した。調べた内容については、GoogleMeet の画面共有機能を活用しクラスで発表を行い、全員が一通りの登場人物について基本的な知識を得た。なお、発表の最後には「どの女君が幸せだったと思うか」と問いかけ、投票を行った。以下はその際に生徒から上がった意見である。

源氏物語すごろくを作ろう　～光る君誕生～

「源氏物語」は、言わずと知れた日本の誇る長編小説です。みなさんには、この作品の魅力を存分に味わってもらうため、「源氏物語すごろく」を作ってもらいたいと思います。その前段階として、「光る君誕生」を読みながら、主人公・光源氏がどのように設定されているか、どのような物語として設定されているのかを確認していきます。

【次の観点に基づいて、本文を整理しよう】

▼源氏の母・桐壺更衣を取り巻く状況について整理しよう

課題①桐壺更衣について書かれている描写②帝の寵愛の深さに関する描写③周囲の反応を、三色で下の本文に線を引こう

課題②光源氏はどのようにこの本文で描写・説明されているか、抜き出してみよう。

課題③桐壺更衣はどのような人物として描かれているか、説明しよう。

↑授業時に用いた読解のためのワークシート

1位　朧月夜

・わたしもめっちゃ愛されたいから。　・ハイスペックで男から愛される、強い。

・源氏を振った女。　・スリルがある熱い恋ができていたから。

・すべてを兼ね備えた上、源氏からも帝からも愛されて幸せでしかない。

2位　明石の君

・平凡な人生を過ごすかと思っていたら源氏と出会って人生大逆転！

・運がよい。　・娘も産むし、紫の上とも和解できるから。

3位　花散里

・男が守りたくなる系女子。つきあうなら、一緒にいて落ち着く人。結局こういう人がいい。

・性格がよいので、周りからも愛されたかも。　・争いに巻き込まれず、最終的に幸せをつかんだ。

発表をこのような視点で振り返ることで、自分自身の考え方と重ね合わせながら登場人物を捉え直すことができたことは、すごろく作成[2]の際の観点として有効だった。

第三次では、すごろくの作成[3]に取りかかった。すごろくのマスの数は24であり、生徒が調べて発表した15人の登場人物をすべて配置してもマスがあまってしまう。かといって、ほかの登場人物を配置するとなると、何を基準に9名を選ぶのかで意見は割れることになる。また、先述したとおり「その出来事をどのように意味づけるか」と「すごろくのゲーム性」は相関しており、かなり活発にアイディアを出し合っている様子が見受けられた。イラスト等を入れて工夫する班、マス目の文面にこだわる班、ゲーム性を高めることに工夫を凝らす班など、メンバーの個性が生かされたすごろくが完成した。完成したすごろくは、単元の最後で実際に遊んだ。

どのすごろくが面白かったか、という優劣を付けることはあえてしなかったが、他の班のすごろくを実際にプレイしてみることで「源氏の一生がよくわかった」という声が自然と上がった。物語をどう捉えているかの違いや、そもそも源氏の生涯がどのようなものだったか、物語の全体像を知るという所期の目的を果たすことができた。

---

[2] すごろくのテンプレート「オタク集まれ～！「推しすごろく」をつくってあそぼう！ 」
Pixivison おもしろいもん観たいじゃん（https://www.pixivision.net/ja/a/5310）

3，実践を振り返って

二つの実践では、ジャパンナレッジ School（電子図書館）を積極的に利用し、読み取ったことや考えたことを表現する活動を行った。ICT の普及は、旧来の、口語訳と文法が中心の古典の学習においては、学習者がインターネット上の解説や口語訳を引き写す原因となる「悪者」として捉えられることが多い。しかし、インターネットを介していつでも、どこからでも豊富な資料にアクセス可能になったことは、生徒の読みの多様性を広げ、個別最適な学習を実現していくための有力な基盤である。また、発表においても Meet の画面共有機能を利用したり、資料の共有も容易になったりと、より自由な授業が可能になった。ICT の利用は「わからないから」と、苦手意識から敬遠する教員も多いが、必要な場面で、必要なスキルを学び、取り入れていくことは、豊かな読みの実現にとって重要な方法といえる。

今回の実践を通じ、生徒に「古典の学習には逐語訳だけが重要なのでなく、当時の人々の生き方や考え方にも大きな魅力がある」ことを生徒が発見することができたと考える。学習者は、我が国の伝統的な言語文化としての「古典」を読み継いでいく存在である。単なる知識ではなく、豊かな作品世界の存在に触れ、その価値を理解して次の世代へと受け継いでいくよき担い手になってほしいというのが、一貫した授業者の願いである。また、当然のことであるが、古典は教科書にはごく一部しか採録されていない。たとえ採録部分に関心が持てずとも、実践Ⅰで見たように、視点を大きく広げることで、生徒それぞれの「気づき」「お気に入り」が生まれる可能性は十分にある。教科書本文だけが多くの人々が胸を躍らせて読んだ、その「わくわく感」の入り口として、このようなゲーム作りは有効であったと考える。

いずれも作品をもとに作り換えるという点では「翻作」にあたり、「講義形式の古典よりも能動的に昔の人の考え方に触れることができる」（[4]2022　金田）活動である。翻作のためには、生徒がその作品にじっくりと向き合い、自分自身に語りかけながら、自分の言葉で表現することが重要になる。また、特に実践Ⅱにおいて、個々が自己の関心や知識のレベルに応じて作品に向き合い、表現するという点では、個別的かつ主体的な[5]同時異学習が成立した単元であった。高校古典では講義形式の授業が多いと思われるが、一方通行の授業では（知識・技能の面での指導はしやすいのかもしれないが）個人の読み深めにまで至らないであろう。自分が読み、考えたことを他者に伝えるために工夫を凝らす、その時間は潤沢で楽しい。限られた授業時間の中で、可能な限り、「読むこと」の楽しみに浸る単元があってもいいのではないだろうか。その意味でも、翻作法の効果は非常に大きい。

---

[4] 金田富起子「高等学校国語科における翻案活動の学習意義」2022.03　早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　29 号-2

[5] 首藤久義「同時異学習のすすめ―発想の転換」第一章「人間尊重の学習支援」第二節　2023

4, 本実践を経て

本実践ののちにも「作品をまるごと読む」ことには継続的に取り組んでいる。教科書は広く様々な作品に触れるにはよいが、作品がその作品としてどのような魅力を持っているか生徒が考えることには結びつきづらい。前述の通り、ICT の普及により、教科書以外にも古典作品に触れることができるようになっている。教科書に掲載されている部分では興味が持てなくとも、ほかの部分が思わぬ入り口になる可能性は十分にある。

また、授業者が行った中学生対象のミニ講座では「古典なぞなぞ」を入り口にした和歌の紹介を行った。中学生は、漢字に注目したり、音数に注目したり、非常に活発に議論し熱心に取り組んでいた。古典常識なども教え込みがちな部分ではあるが、このように遊びの要素を学習に取り入れることで親しみやすく、楽しく学ぶことができる。読むために必要な知識・技能が多く、とかく難しくなりがち（難しいと生徒に敬遠されがち）な古典にとって、「遊び」の要素を取り入れることは、心理的なハードルを下げるという意味でも有効だと考える。

和歌に秘められたメッセージは何か、生徒は活発に議論していた

古典は我が国において、その魅力で人々をとらえ、現在まで読み継がれてきた貴重な財産である。そして、どのように読むか、どこを楽しいと捉えるか、それは生徒一人一人に委ねられる読み手の権利であることは重要な視点だと考える。その自由さ、楽しさを少しでも伝えることができる授業をこれからも考えていきたい。

（おかだようこ／西武学園文理高等学校）